

『ご主人様の結婚事情』

著：森本あき

ill：明神 翼

面接当日、梅森家への道を歩きながら、周囲がすべて高級そうな住宅なのに驚く。叔父も叔母も、それぞれ、結構な額のお給料をもらっていて、それなりに裕福なほうだと思うけれど、こんな家は買えない。

お金持ちって、こんなにたくさんいるんだなあ。

感心していたら、その中で一番大きなのが梅森家だった。

まず、家が外からは見えない。大きな塀に囲まれて、その内部に高い木が、ぐるりと植わっている。完全に視界をさえぎられていた。

入るのにもセキュリティチェックが必要で、そのための屈強なボディガードが入り口のすぐ脇の小さな建物で待機している。ちらり、とその建物を窓越しにのぞいたら、壁の一面がセキュリティカメラの映像で埋めつくされていた。

泥棒もここに入るのはあきらめるだろう。

入り口に入って五分ほど歩いたら、三階建ての白亜の建物が見えてくる。横にも上にも、とにかく大きい。

お金持ちの上に、大金持ちっていうものが存在するんだな。

賀月は感心した。そして、思う。

こんな場所の使用人に自分はふさわしくない。

白亜の建物の中に入ると、大理石の床に天井まで吹き抜けになった玄関ホール。自然の光がきらきらと輝いていた。

その奥には三階までつづく大階段。テレビで偶然見た宝塚のショーで使っているものみたいだ。手すりには豪華絢爛な飾りが施されている。

そこに、片山がやってきた。うちに来たときとはちがい、きちっとグレーのスーツできめている。

「賀月くん、よく来たね。大学合格おめでとう」

「ありがとうございます」

賀月は頭を下げた。

「自立するためにがんばりました」

おかげで、勉強の楽しさに目覚めた。よっぽどのことがないかぎり、大学に行く。

「きみには、ご長男の京介さまのお世話係をやらしてもらおうと思っている。これまでも何人か面接したんだが、京介さまのお気に召さなくてね。こればかりは相性があるから、優秀なだけではどうにもならないのじゃよ。なので、賀月くん、これから京介さまに会っていただくが、もし、京介さまがきみを雇わないことにしても恨まないでくれたまえ」

あ、そうか。受かる気満々で来たけど、落ちることもあるのか。そして、どうやら、そのわがままな長男は人を見る目が厳しいらしい。

いくつなのかわからないけど、子供の世話は大変そうだ。子供が苦手だと公言していた叔父は、よく自分を引き取ってくれたものだと思う。感謝しかないし、これから長い時間をかけて、恩返しをしたい。

「おいくつですか？」

「二十歳だ」

「...は？」

二十歳って、二十歳だよな？

賀月はわけのわからないことを考える。

だって、二十歳だよ？ 成人してる人に、なんでお世話係なんているの!?

うん、やっぱり、これは断って正解かも。二十歳になってまで他人にめんどろを見てもらう人とは、絶対にあわない。

「梅森家は何歳だろうと、ご家族一人一人にお世話係がつくのじゃ。お金持ちとは、そういうものなんじゃよ」

ふーん、ますますあわない。

ここは、確実にきらわれよう。ドアをガンと音がするぐらい勢いよく開けたり、頭を軽くしか下げなかったり、敬語を使わなかったり。

うん、それがいい。

礼儀にうるさい人なら、一発で不合格になる。

片山のあとにつづきながら、賀月は不遜な態度になるような歩き方を研究した。こう、腰から出せばいいかな？

「失礼します」

玄関ホールから右に行ったふたつ目のドアをノックして、片山は中に入った。これで、ドアを音高く開ける作戦は無理になったが、礼儀知らず作戦はまだ実行できる。

どーも、畑山賀月です～。

指を二本立てて、敬礼みたいな感じであいさつをしようとして、賀月は止まった。ソファーに態度悪く寝転んでいる人と目があったからだ。

かっこいい。

そう思った。

それ以外、何も思わなかった。

そして、恋に落ちた。

きっと、相手も。

だから、大学をあきらめた。お世話係を引き受けた。

それも全部、見つけてしまったから。

一生に一度しか出会えないだろう、本気で好きになれる人を。

「あっ...ふっ...んっ...」

結局、お風呂で京介の体を洗っているうちに、そういう雰囲気になってしまった。お湯をはったお風呂に京介が座り、その上で賀月は腰を振っている。

京介のペニスだけじゃなく、お湯も賀月の中に出たり入ったりしていた。

「かわいいな」

京介が賀月を引き寄せてキスをする。舌が中に入ってきて、賀月は自分から絡めた。京介の唇はそのまま降りて、乳首をちゅっと吸い上げる。

「あああ...っ...！」

賀月は京介の肩に手を置いて、その快感を受け止めた。

京介が賀月の乳首に交互に吸いつく。真っ赤に熟れたそこは、触れられるだけでも気持ちいい。

賀月はそろそろと腰を上げた。京介のペニスが抜けるか抜けないかのところで腰を回す。ペニスの太い部分が襞の部分をこすって、すごくいい。

「あぁっ...いいっ...あっ...気持ちいいっ...」

「やらしいことしてんな」

京介は賀月の乳輪に舌を這わせた。円を描くように、乳輪を刺激する。

「いやぁ...それ...だめえ...」

すとん、と腰が落ちて、また京介のペニスを全部飲み込む。京介が下から、賀月を突き上げ始めた。

こうなったら、そろそろおしまいだ。

ぐちゅ、ぐちゅ、という音は、お湯なのか、それとも、自分たちの体液なのか、わからない。浴室に響くと、すごくいやらしい反響をもたらす。

乳輪を吸いだされて、乳頭を舌でつつかれた。内壁はあますことなくペニスでこすられる。

「あっ...あっ...あっ...」

京介の肩を持つ手に力が入った。それを合図に、賀月は放つ。

「はあああああっ...ん...！」

京介は内壁の収縮を楽しんだあとで、中に放出した。しばらく抱き合って、賀月は京介の上から下りる。お湯の中に、精液の塊がいくつか浮いたり沈んだりしていた。

賀月はいったん、お湯を流してから、新しくお湯をためる。お湯がなくなっても、イッたばかりで体が火照ってるから、別に寒くない。

京介の隣に横たわりながら、賀月はぼんやりとお湯につかる。二人並んでも余裕で入れるほど広い浴槽なんて、温泉以外で見たことがない。

梅森家は生粋のお金持ちで、何もかもが規格外だ。毎回、いろんなことに驚かされる。

「疲れたか？」

京介が賀月の濡れた髪を撫でた。

「まあね。三回も出せば、疲れるよ」

お湯がちょうどいいところになると、賀月は止めた。自動運転もついているが、機械には京介の好みはわからない。

なので、一緒に入るときは賀月がすべてやっている。

「そうだな。俺も疲れた」

京介が、ふう、と息を吐いた。

「めずらしいね。京介が疲れるなんて。いつも元気いっぱいじゃん」

「もうすぐ二十五になるからな」

出会って四年。賀月は二十二歳になった。京介は二十四歳。あと九ヶ月で二十五歳の誕生日を迎える。

それは、ただの数字じゃない。

二人にとって、大きな意味を持っている。

「そうか〜」

賀月はなるべく明るく答える。

「梅森家では大人になるってことだもんね」

そして、同時に、結婚をしなければならない。それは、梅森家を継ぐものとしての習わしだ。

その相手を決めるお見合いが、そろそろ始まる。

二十五歳になったら、京介は結婚する。

そのことは、出会ったときから知っていた。

あの日、面接で出会って、恋に落ちた。二人でいろいろ話してください、と片山が出て行ったあと、京介は最初に告げた。

俺、二十五歳で結婚するんだ。

何を言ってるんだろう、と不思議がる賀月に、京介はつづける。

だから、おまえのことが大好きだけど、ずっとおまえだけのものではいられない。それでもいいか？

賀月は一瞬も迷わなかった。

それでもかまわない。

この人が欲しい。

いいよ、と言い終わる前に、京介に激しくキスをされた。そのまま、セックスになだれこむ。

初めてだというのに、ただ気持ちよかった。

何回も何回もした。

だれかを好きになることと性欲が、こんなに結びつくんだ。

それに感動したほどだ。

大学には行かない。お世話係になる。

セックスをしながら、そう決める。

だって、京介のそばにいたい。

五年後に結婚するというのも、そのときの賀月には本当にどうでもよかった。

だって、まだまだ先の話で、五年間もおなじ熱量で京介に恋をしているとは思ってもなかったから。

恋は冷める。

よく言われるそっちのほうを信じていた。

なのに、四年たったいまも、京介のことが大好きでしようがない。

離れたくないし、そばにいたい。

結婚しても、世話係でいろ。

京介は、ずっとそう言っている。

それは、とても魅力的で残酷な命令だ。

京介がだれかと楽しそうにいるところを見なければならぬ。だけど、一生そばにはいられない。

賀月はいつも少し迷って、それでも、うん、と答える。

だって、京介がいない人生なんて考えられない。

でも、その考えが揺らぐときもある。

実際にお見合いの時期が近づいてきて、こここのところ毎日、たくさんの釣書が届く。それがリビングの大きなテーブルの上にうず高く積まれていた。

あの中から、だれかを選ぶんだ。

そう考えると、苦しくなる。

京介は、二十五歳の誕生日に結婚しなければならない。

遠い未来のことであつたはずのそれが、現実として迫ってくる。

「そう、大人になるんだ」

京介は賀月の肩を抱き寄せた。ぴったりとくっついていると、この世に二人以外が存在するなんて信じられないほど、京介のことで心がいっぱいになる。

「悲しいことにな」

京介は、こつん、と額をぶつけた。そのまま、ちゅっ、とキスをする。

「というわけで、大人になる前にいろいろして遊ぼうぜ。メイド服のつぎは…そうだな、スクール水着とかどうだ？」

「バカでしょ」

賀月は冷たい目を向けた。

「そんなの、絶対にやんないからね！」

「じゃあ、ビキニで撮影会ごっこ」

「女装なんかしないってば！」

「なんでだよ。似合ってるのに」

「それ、全然嬉しくないから！」

いくら京介にほめられても、まったくもって響かない。

「大人になる前に、子供じみたことやっときたいんだよ。いいじゃん、おまえ、着るだけなんだし」

「いやだって言ってるでしょ！」

こんなバカな会話をして。

こんなふうには笑い合って。

抱き合って。

キスをして。

この四年とちょっと、ずっと楽しく過ごしてきた。

五年後の自分は、京介が結婚しても大丈夫になっている。

なんで、そんなふうには気軽に考えていたのだろう。

全然、大丈夫じゃない。ちょっとでも気を抜くと、京介の前でも泣いてしまいそうだ。

だから、二人きりのときは、なるべく、この話題にならないように気をつけている。なのに、たまに京

介が言い出すから、本音を隠してどうにか笑顔でやり過ごすしかない。  
こうやって二人きりでいられる間は、幸せしか感じたくない。  
それでも、いつかは別れがやってくる。  
梅森家の跡継ぎと、そのお世話係。  
本来の関係に戻るときが、すぐそこまで来ている。  
あの日、一生に一度の恋をした。  
だけど、それがハッピーエンドじゃないなんて。  
...こんなに苦しいことがあるのだろうか。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>